

教育関係と共依存

——「子ども理解」はたやすいことではない——

中村 哲也

一、自尊心・自尊感情を剝奪するものとしての「共依存」

私は、これまで、精神医療における「共依存」概念をいくつかの小中学校の国語教科書教材の教材研究解釈や読解）に使用してきた。

とりわけ、主人公をはじめとする様々な登場人物の相互の人物関係のあり方、そのダイナミズムを捉え、理解していくために有効ではないかと考え、中学教材では、ハイム・ポトク「ゼブラ」^①、ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」^②、太宰治「走れメロス」^③、山川芳夫「夏の葬列」^④、そして小学教材では新美南吉「ごんぎつね」^⑤を取り上げてきた。

「少年の日の思い出」では、主人公の少年の「蝶の採集」へののめり込み（嗜癖）と、教師の息子で、非の打ち所が無い模範少年エーミールへのあこがれと憎しみをない交ぜにした、彼の共依存感情を

扱い、「走れメロス」では、メロスの激怒と問題行動（国王の殺害未遂）の背景にある「妹」との共依存について、「夏の葬列」では、いつも主人公の少年をかばう「ヒロ子」の共依存的支配の問題性について論じた。さらに、「ごんぎつね」に関しては、主人公「ごん」の「兵十」への献身的な「償い」をひとつの共依存の病理として取り上げ、次のように私は論及した。

「ひとりぼっちの小ぎつね」ごんは、母を亡くした独り身の兵十の母親役を演じ続けた。小狐が過酷な生存環境を生き抜くためには、さらなる弱者である兵十をあたかも分身でもあるかのように仕立て上げ、共依存することが不可欠だった。頼まれもしないのに、栗や松茸を届け、「もって行ってやりました」「もって行ってやるのに」と恩着せがましいごん。世話してやった、めんどろみ

てやったのになぜ俺の思い通りにならないのかと慨嘆するごん。
そして、死んでもなお兵十をコントロールするごん。

こうした「ごんぎつね」における共依存の病理は、これまで、「ごんぎつね」における「一方的な甘え」（府川源一郎）、「他者感覚の欠如」「他者の不在」「他者認識の甘さ」という言い方で指摘されてきたことと密接にかかわっている。しかし、さらに、私としては、こうした問題は、「他者の抑圧」「他者支配」という関係嗜癖（共依存）の観点から掘り下げる必要があると思う。実際、表面的には崇高ともいえるごんの「つぐない」や献身や自己犠牲の行為は、いわゆる日本の伝統的価値観、美意識、「母性信仰」とも重なる面が多く、私たち読者の解釈を振り回してきたのではないだろうか。

本稿の主眼は、まず、そういった価値観や美意識の覆いや隠れ蓑をはぎ取り、その下に隠されてきた「共依存」という関係嗜癖の問題」を析出することであった。善意や善行の名のもと、本人すら十分気づけない覆い隠された動機がしみ込んでおり、この巧妙なひとりよがりの正当化がもたらす虚偽を、「ごんぎつね」は浮き彫りにしているのである⁽⁶⁾」

なお、「ゼブラ」では、事故による後遺症から手足に麻痺が残り、

暗く沈みがちな毎日を送る少年「ゼブラ」の葛藤や悩み、不安、心の傷が、周囲の人々、特に、ベトナム戦争で傷ついた心身を持つ美術教師「ウィルソン先生」との交流、他者による共感や理解を通して癒されていく過程を論じ、他の論稿と比べ、病理的側面よりも、思春期における心の傷の癒し、回復、心の成長に重点を置いたものとなっている。これは、直接的には、「共依存」概念とはかわってはいないように思われるが、精神医療やカウンセリングの観点からみると、共依存によって受けた心の傷、対人関係の歪み、生きづらさからどのように青年が回復していくかというプロセスの問題と密接に関連してくるのである。

そもそも文学は、人間関係の実相に迫り、多種多様な人間関係とそれが織りなす様々な関係性の問題を抉り出すものである以上、無意識的にせよ意識的にせよ、「共依存」のテーマはつねに何らかの形で作品世界の中に描きこまれている。したがって、国語科の教科書教材の中に、共依存的な人間関係の問題として読み取れる内容が少なからずあるのは当然と言えば当然のことである。

しかし、振り返ってみると、私自身、共依存をはじめ、「嗜癖」（アディクション）、「依存症」などの精神医学のことばや考えに関心を持ったのは、やはりそれらが様々な心の病理や問題行動の渦巻

く現代社会を読み解くキーワードであると切実に感じているからにはかならない。

私は、大学の教育現場において、日々若者たちと接しながら、彼らをどう理解していいかに迷い、当惑することが少なくなく、また彼らの悩みの相談などに対してどのような助言が適切かということでも頭を悩ますことがある。現代の若者が抱える心の問題、生きづらさ、抑鬱感、人間関係の葛藤・対人ストレス等々。その奥深いところに果食うものはいったい何なのだろうか。

近年、頻繁に耳にするのは、日本人の青少年における「自尊心・自尊心の低さ」ということである。また、この点を裏付けるかたちで、国際比較における青少年の意識調査においても、日本の青少年の自尊心や自己評価が他国に比べ低く乏しいという報告も出されている^①。さらに、今日の学校現場において、生徒指導上の共通認識、共通課題として、大きくクローズアップされ、切実感を取り上げられ論じられているのが、「自己有用感」をいかに高めるかということである。

私自身、近年、生徒指導をめぐる中学校のある教員から、「自己評価・自尊心の低さが生徒指導上の問題行動の原因であり、自己有用感さえ高めれば……」という声を聞いたことがある。「自己有用感」あるいは「自己肯定感」という、教育心理学で使われてい

たこのことばほど、燎原の火のようにここ十年ほどで今日の教育現場に広く浸透したものはない。しかも、そこには、現場の強い切迫感、切実性がこもっている。ことに思春期の生徒が通う中学校ではそれがひしひしと伝わってくる。

したがって、生徒の自尊心を高め、自己有用感をどう向上させるかという課題は、今日、思春期の問題行動を解決する有力な手立として学校現場で積極的に取り上げられているのである。ただし、注意したいのは、自尊心・自尊心と「自己有用感」の違いである。後者は、他人に必要とされ、全体の福利に役立つ人間といった意味合いがあり、多分に共依存的な他者関係の側面を持っている。

それでは、なぜ、自尊心・自尊心が低くなるのか、あるいは、子どもや青年（さらには大人を含めて現代人）から自尊心・自尊心を奪う背景や要因は何なのか。この問題を考え、突き詰めていくと、やはりこれまで述べてきた「共依存」の問題に行き着く。

共依存は、子供や青年から自尊心を奪う、いわば「自尊心泥棒」であり、日本人の青少年の自尊心、自己評価の低さの背景には、家族（親）、学校、社会、国家などのさまざまなレベルでの共依存による支配が働いている。この点をしっかり把握し、理解することなくして、自尊心や自己有用感を高める最善の方策・手立てを検討し、構築することは難しいのではないかと私は思う。

本稿は、私が今まで考えてきた「共依存」についての考えをまとめ、これを現代社会(戦後日本社会)の基本的な問題として射程に据える試みであり、それはまた、従来、精神医療、心理療法、カウンセリングの領域で使われてきた概念・用語を積極的に活用しつつ、人間関係、人間コミュニケーションの実相に潜む矛盾やパラドックスの問題へと光を当て、「教育的実践知」のあり方を問い直し、捉え直す試みでもある。

二、臨床教育学との接点

このように考えてくると、「共依存」概念は、実際の学校現場、生徒指導の現場だけでなく、教員養成・教師教育の実践においても重要な概念になる可能性を秘めている。

青少年の心や行動を熟慮し、読み解き、洞察する力、いわゆる「子ども理解」の力量形成が、教師教育の根本課題であり、「共依存」概念は、「子ども理解」または「教師の自己理解」「子どもと大人」「生徒と教師」の関係性の理解にとって欠くことのできない概念であるとは私考える。

これは、まさに教育における「臨床」的な課題でもある。つまり、共依存は、必然的に、「子ども理解」をテーマ化する心理臨床・教育臨床の課題、研究と結びついている。

臨床教育学の代表的な提唱者のひとりであり、「子ども理解」をその中心概念として位置付けている教育学者の田中孝彦は、次のように述べている。

「今、教師になりたいと考えている学生たちの間では、社会と子どもと学校と教師の「危機」的状况が深まるなかで、「自分は教師に向いているか」「教師として働き続けられるか」という動揺と不安が、急激に広がり深まっている。そのなかで、彼らが不安を抱きながらも、よく考え、なお教師という仕事を選び、働き続けていくためには、彼らに対して「教師の使命」を精神主義的に説いてみても、「実践的指導力」を強調して「子どもの扱い方」「授業の仕方」の技術主義的な訓練を施してみても、ほとんど何の役にも立たない。(略)子どもと直接に交わる体験をし、戸惑い・迷い・悩み・喜びなどを実際に感じることで、そして子ども理解の学生カンファレンスのような場で、そうした体験と実感を反芻し、それらを言葉にして表現し、他者に聴きとられ、じっくり共に考え合うことには大きな意味があると感じてきた」^⑧

田中のいう「カンファレンス」(会議、相談)。その動詞形の confer

は、語源的に、ラテン語のcon(共に)+fare(持ち寄り)に由来している。共に体験を持ち寄り、語り合い、受け止め合い、分かち合うことを通して、「子ども理解」は深まり、それとともに教師自身、自己の実践を振り返り、教師としての自己のあり方を問い直す場となる。したがって、先述したように、「子ども理解」が「子ども」に対してだけの理解に終始せず、つねに、理解する側の教師⇨大人の自己理解の変容に結びつくこと、すなわち理解する側の自己理解への反転を伴っていることが重要なのである。

三、「共依存」とは何か——世話焼き、子ども扱い、恩着せがましさ

「共依存 (co-dependency)」とは、依存症治療などの精神医学の用語であるが、三種類の嗜癖概念(「物質嗜癖」「行為過程嗜癖(プロセス嗜癖)」「関係嗜癖」)のうちの「関係嗜癖」に属している。「関係嗜癖」とは、特定の人間関係に自己破壊的なまでにのめり込み、他者の問題に執着して、その人生に侵入・介入する快感への嗜癖で、「共依存」はその代表的なものである。(なお、嗜癖は、英語「アディクション (Addiction)」の訳語であり、「悪習」「悪い習慣」へののめり込み・耽溺を意味する。生活に困難を来たし、重くなれば病気と見なされ、「依存症 (Dependence)」となる。嗜癖とい

う場合には、幅広く軽症例から重症例までを含んでいる)。

「共依存」は関係嗜癖の代名詞として、アルコール依存症治療を通して見出され、流布した概念で、アルコール依存症の夫に対してとる妻の世話焼き、子ども扱いといった態度・行動(イネーブング⇨支援)が、逆に、夫のアルコール依存を支え、援助していることが明るみになり、この概念が目されるようになった(もちろん、アルコール依存症の妻と、それに対する夫の共依存もある)。自分への関心⇨自立を放棄して、他者⇨夫・娘・息子などの人生に寄生し、他人の人生によって自分の人生を満たそうとする「行動や生き方」とり、愛情や「ケア」という名で他人の人生を無力化し、「おんぶお化けのように」他人の人生に重苦しく取り憑き、支配・コントロールする。他人との境界がなく、介入する世話焼きタイプの人間であるが、世間一般の眼からは、他人につくすタイプとして評価される。常套句として「あのひとは、私がいなければだめだ」「あの子は私を必要としている」といったことが使われ、自分こそあの人を助けられるといった、相手にとっての特別な「かけがえのない」人間、とりわけ「救世主」や「救いの女神」として密かにそして巧妙に君臨し、どこまでも相手の人生に侵入し付きまとっていく。精神科医の斎藤学は「病的な“共依存の女性のタイプとしてこれを取り上げて、次のように語っている。「一種の誇大妄想にとり憑かれている

のである。「夫という一人の男と、その男との間の子どもたち、彼

らの人生は私がいなければ成り立たない」という誇大妄想である。

（略）自分に依存する者をコントロールすることによって成立する精神的な安定など、それ自体が病的なものである」^⑨。

たしかに、傍目には献身的、殉教的な姿と映るので日本の風土では評価されて見られがちである。やたらと相手のことが気になり、面倒を見たり、他人のためだけに生きる人生をたどる。その一方、相手に尽くしているのに相手から何も返礼がないことで、悲しみ、抑うつ感を覚えることも多い。

また、「こんなにあなたに尽くしているにどうしてあなたは：」といった「恩着せがましき」も共依存の特徴である。「こんなにしてやっているのだから、私のいうことをききなさい」という言い方で他者をコントロールしていく。共依存が「愛他的自己中心性」といわれるのも、こうした「恩着せがましき」の巧妙なエゴイズムを言い表している。

四、子ども、青年を追い詰める「共依存」——「かけがえのなさ」のパラドックス

共依存の大きな特徴は、よりかかる他者が自分よりも必ず弱い者だということである。「自分がいないと生きられない存在へと対象

を幼児化させ無力化していく支配は、しばしは世話やケアや愛情行為と見紛うこととなる」^⑩。まさに、献身、自己犠牲に見せかけた他者支配、他者コントロールであり、いわば、利己的な愛他性、愛他的なエゴイズム・自己中心性といえるだろう。

「あなたのためを思って：」という常套句を頻繁に使い、「わたしがいなければあなたはだめ」「わたしがいるからあなたは生きていける」といった相手にとって「かけがえのない」存在として君臨し、支配・コントロールしていくのである。

ひとつの事例として挙げることができるのは、いわゆる「ダメメンズ」^⑪（ダメな男）を好み、ダメメンズたちの世話を焼くタイプの女性である。彼女たちは自分より優れた男性とは決して付き合わない。優れていれば世話焼きができないからであって、結局、共依存を「愛」とはき違えている人たちなのである。

さらに、この「かけがえのなさ」ということは、一見、耳触りのいい響きに聞こえる。「かけがえのない人」「かけがえのない愛」「かけがえのない命」などなど、取り替えられない唯一無二という意味合いをもつが、人間関係、他者関係、特に恋愛関係においては「かけがえのなさ」は、閉ざされた排他的「二人称の世界」「ふたりの世界！」（あなた―わたし、汝―我）、固い「対」構造の世界を形づくる。「きみだけに」「あなたしか」の世界である（六〇年代のG

Sの歌を思い出す。「かけがえのなさ」が不等で、「非相互的」になった場合が、共依存の関係となる。臨床心理士の信田さよ子は、これを親子の共依存関係との関連で次のように述べている。

「かけがえのさが非相互的な場合、その関係は非対称的で権力的なものとなる。つまりかけがえのない存在になったほうが、もう一方に対して強者となり権力的になりうることだ。親は、だから子どもにとって強者であり、権力的な存在である。子どもの虐待をみればそれは明らかだ。親以外に自分を養育してくれるひとがいない(かけがえのない)ことを子どもはよく知っている。その親に食事を取り上げられたりすれば、それは自分が悪い子だからと思うしかない。なぜならかけがえのない存在を失うわけにいかないからだ。こうして親は子どもに権力を行使するが、自分が子どもにとってかけがえのない存在だからこそできる行為である」⁽¹²⁾

右で、信田は、「虐待」の事例を挙げているが、共依存もまた、虐待と等しく他者を乱用(abuse 常軌を逸した使用)する行為にほかならない。被虐待児は親から暴力を受けながら、それは「自分が悪いから」「自分のせい」と思いこむことは一般によく知られてお

り、親との重苦しい共依存関係の中で育った子どもや青年たちも、過剰なまでの自責感、罪悪感に悩み苦しむ者たちである。

五、共依存と罪悪感——親の期待という「虐待」

以上ように、共依存関係においては、「対等で対称的な」人間関係は成り立っていない。つねに、「上—下関係」「主—従関係」「支配—服従」といったどちらか一方が優位になる競合関係・力関係となっている。

共依存の親は、子どもに対し親の価値観を押しつけ、巧妙に自らの「期待」(欲望)によって縛りつけていく。つまり、「期待」(欲望)で、子どもをコントロールしていくのである。ときに、この「期待」は世間の常識や価値観にすり替えられ、親の地位や職業による圧力、「先祖代々我が家の家系は……」「うちは代々……」といった「家族神話」「家族シナリオ」のかたちで、子どもたちの心に深く侵入する。

この場合、親の愛情は、子どもの全存在を受け入れる「無条件の愛情」ではない。それは、あくまでも、「私(＝親)の期待に応えたら愛してあげる」式の「条件付き」の愛情関係である。それゆえ生殺与奪の権を握られた子どもにとって、親の愛情を失うことほど怖いものはない。毎日、不安と怖れを感じ、親の顔をうかがい、びくびく怯え、親の期待・欲望を必死で読み取り、自分を縛らざるを

得ない。こうした家族は、子どもからしてみれば、もはや安心・安全の場ではなく、さながら恐怖と不安の生き地獄といえるだろう。斎藤学は、こうした「期待」で子どもを縛る家族の共依存を「やさしい暴力」「見えない虐待」と呼んでいる¹³⁾。たしかに、「何が悪いのか、とうぜんだろ」と言って世間の価値観・常識という「期待」を素朴に親たちが信じ、また「家族神話」などの隠微な「期待」に囚われていれば、決して自らの暴力性や虐待(他者の乱用)に気づくことはない。

子どもたちは、親の期待・欲望に応えるべく、懸命に「いい子・良い子」になろうとがんばる。そして、そのための「生存戦略」として様々な防衛手段、鎧や盾を身に着ける。そのひとつは、「べき」「べし」「ねばならない」という当為の鎧で自らを固めることである。今ある自分の感情をすべて「こうあるべきだ」という意志の力で振り捨ててしまう。自分の感情や欲望をすべて「べき」「べし」で押し殺してしまうため、他者(親あるいは教師や世間)の期待・欲望と自分のそれとを区別できず、本当に自分のやりたいこと(欲望、欲求、必要)が分からなくなってしまう。

このような「やさしい暴力」が続く中で、子どもの自尊感情・自尊心はどんどん剥ぎ取られる。「いい子」であろうとする懸命で執拗な努力。それに必死に邁進すればするほど、確実に自己評価は低

下し、罪悪感が高まり、自尊感情は失われていく。「期待に沿えず、いい子になれずごめんなさい」という激しい自責と罪悪感、まさに「生まれて、すみません」の自虐的な罪悪感に子どもの心は覆いつくされる。

親の期待・欲望によって自己の欲望をコントロールされ、支配され続けてきた子どもたちの自尊感情・自尊心の低さ、自己評価の低さは、「やさしく」「目に見えず」世間的な常識に隠されているが、アメリカの精神科医ジュディス・ハーマンがいう、実際に親などから暴力を受けてきた被虐待児の激しい自己嫌悪(自分を汚物やゴミにたとえたり、吸血鬼、犬、ドブネズミと自分を呼ぶなど)となんとかよく似ていることか。

ハーマンは、これを「内的邪悪性の感覚¹⁴⁾」と呼ぶ。どこまでも留まることのない底なしの自己評価の低さである。いい子であろうとするひたむきな思いの裏側に、「自分は悪い子」が隠れ住み、「自分はいい子になって、この辛い運命を変えるのだ」という思いにしがみつき、自分の欲望ではなく、親(他者)の期待・欲望の実現という「理想」に向かって自己に鞭打つ、「べき」「べし」という「当為」の鎧を着込んで。はたから見れば、こうした子どもは、模範的な「いい子」に映るが、一面では、エキセントリックな「ガンバリ屋」とも感じられる。

「この性質の悪い内的邪悪性の感覚は、しばしば被虐待児がよい子でありつづけているために、カモフラージュされて見えないことが多い。虐待者をなだめようとして、被虐待児はしばしば完璧な演技者となる。自分に求められるものは何でもこなそうとする。両親に対して心やさしい孝行娘となり、ときばきと事をはこぶハウスキーパーとなり、学業優等生となり、社会の模範と仰がれるようになったりする。完全主義者の熱意を以って事に当たるが、それは両親の目の中に好意の色を読み取りたいという焼けつくような求めに駆られてのことである。成人になった暁には、この早熟な才能は、強いられて生まれたものであっても、職業上の成功を授けてくれる場合があるだろう。しかし、何をやりとげてもそれは自然に自分の資産にはならない。それは自分の演技する自己は真の自己ではない、いやニセの自己だという感覚を持つからである」⁽⁶⁾

ハーマンによれば、こうした被虐待児は、統合不可能なまでに、二つの自己規定に分かれているという。すなわち、「低められた自己」と「高められた自己」という矛盾した自己規定に引き裂かれているのである。たしかに、日常的に見ても、「気が強い」と「気が

弱い」、「小心（「気が小さい」）」と「大胆（「気が大きい」）」が併存する「気が強いが、びくびくした小心者」は珍しくない。しかし、被虐待児の場合は生易しいものではない。普通であれば「ほどほどの長所とゆるされるほどの欠点を持った一まとまりの自己のイメージ」は、被虐待児の場合は、ハーマンによれば、「硬直的であり、誇張され、分裂したものでありつづける。ひじょうに極端な場合には、このようなバラバラの自己イメージは解離された「もう一人の自分の人格」たちの果となる」⁽⁷⁾という。

これは、「尊大な羞恥心」「臆病な自尊心」によって虎へと身を変えた、あの中島敦（一九〇九～一九四二）「山月記」の主人公「李徴」を連想させるものでもある。人から虎へと「解離」するまでに分裂した李徴の自己イメージは、いったい何によってもたらされたものなのか。「博学才穎」「若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられ」るが、周囲の「期待」（欲望）に応えるため、「性、狷介」にして、わき目も振らず頑張りとおす完璧主義・完全主義的李徴。しかし、その完璧主義は、「賤吏に甘んずるを潔しと」せず、「下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである」⁽⁸⁾。李徴の完璧主義は、低い自己評価・自尊心と表裏であり、つねに「おれはまだだめだ」というかたちでより高い評価、完璧を求めて決して満たされることはな

い。他者の「期待」（欲望）を内面化させながら自己評価を高めるべく、自己を鼓舞してきた李徴だが、それによって、李徴自身の生き生きした感情や欲望、喜びに満ちた人生、「真の自己」は篡奪されてしまったのである。「酔わねばならぬ時が、（虎に還らねばならぬ時が）近づいたから」と陶酔＝酔いによってみじめな自己、問題のある自己、空しい自己から逃避する姿、あるいはそれを忘れようとする姿がまさに「虎」だった。

現代青年に見られる様々な逸脱行動、特に、家庭内暴力、暴力嗜癖の意味を把握する上で、右のような「いい子・良い子」の病理性・問題性を抜きに論ずることはできない。

家庭内暴力、暴力嗜癖（アディクション）は、親の期待に答えられない罪悪感が怒り・暴力に転化したものと言われる。ここで、先にも述べたように、共依存が、「上―下関係」「主―従関係」「支配―服従」といったどちらか一方が優位になる競合関係・力関係であり、緊張感に満ちたパワーゲームの関係であることに注意したい。子ども（息子・娘）が、暴れて家の器物を壊し、親たちを混乱に陥れ、一旦、その要求を親が呑むや、子どもの狼藉はますますエスカレートしていく。共依存関係における主―従の力関係の逆転である。子どもは、「困らせる」ことで、親を操作・コントロールするのである。

幼児が、自分の要求を通そうと、デパートや駅で寝転がって手足をバタバタさせて、親を困らせているのと同じことであり、また、人質を取って、身代金や捕虜の釈放を要求する卑劣なテロリストの所業とまったく重なっている。

ものを壊し、親に暴力を振るうだけではなく、彼らは理不尽な暴言でも親を責める。「どうしておれを生んだんだ」「おれの人生がこうなったのは誰のせいなんだ」「いままでの人生を取り戻すことはできないんだ、償え！」⁽¹⁹⁾

こうした家庭内暴力の要因としては、罪悪感・自責感とともに、さらに「自己処罰」「自罰」があると斎藤学は指摘する。親の期待から外れてしまったと自覚した時、自己処罰の感情にとらわれる。

「これはやがて自罰バラノイアという段階にまでいたることもある危険なものである」⁽²⁰⁾。斎藤は、一九九二年六月に起こった浦和・高校教師夫婦による息子刺殺事件（普段から家庭内で暴力を振るっていた息子（二三歳）を夫婦で共謀して刺殺した事件）の中に、親による処罰を暗黙裡に求めた「自罰バラノイア」をみる。

これは言い換えれば、親の期待の呪縛、自分の生を圧殺するような重苦しい共依存の桎梏から逃れるため、やむにやまれず家庭内暴力、非行、引きこもりといった「期待外れ」を子どもたちは血を吐く思いで敢行しているのではないか。自罰、自己処罰もまた共依存

から抜け出ようとする、いわば危険にみちた荒療治のように私には思える。

六、共依存とアダルトチルドレン——学生のレポートから

私は、前任校であるF大学における現代教養コース(夜間主)の授業「子育てと文化」(二〇〇七年度)で「共依存」をテーマに話したことがある。自分なりの問題意識を言いっぱいぶつけた講義だったが、意外にその反響は大きく、授業後の学生のレポートからは多くのことを教えられた。

・授業「子育てと文化」のレポートより

A男……私はこの講義を受けるまで共依存という言葉を知らなかった。しかし、共依存というものはとても身近に存在するものなのである。では共依存とはなんなのか。それは他者をコントロールして寄生すること、他者との関係嗜好の一つであり、簡潔に述べれば、他者の人生によって自分の人生を満たそうとする事が共依存なのである。／この話を聞いた時、私はすぐに自分の父が頭に浮かんだ。私の父は世話焼きで仕切り屋で、愛情を押し売りしてくる。それは悪いことではない。しかし私や兄弟また母が自分の思い通りにいかないと怒り、怒鳴り散らすのである。私の今までの人生を振り返る時、過度の共依存により受けたのは苦痛

でしかなかったように思う。父の共依存の根底にあるのは傲慢で自己中心的な考えだと考える。「共依存」＝「自己中心」が成り立つと私は考えている。共依存する親は愛情表現というものとして子供を自分の所有物のように考えているのではないかと思う。一見子供の成長を願っているようだが、自分の親としての評価そして親のステータスが子供ではないかと思う。私は小学校の頃ソフボールの少年団に入っていた。下手な私に毎晩練習したり、スイングを見てくれていた。そして、なかなか試合に出られない私をよく見に来てくれた。その事に関してはとても感謝している。だが稀に代打としてしか出ない私がそのチャンスを活かせず打てないと、その日家に帰ってから、正座させられ、怒られた事をよく覚えている。確かに毎日夜まで練習させ、子供が打てなかったらなぜ打てなかったらなぜ打てないんだ！と怒鳴る気持ちもわかる。しかし、小学生の私にとって、毎日練習してもらって悪い、今日こそ打たなくてはとすごいプレッシャーで緊張してしまいまったく体が動かなかった。正直あの頃は試合など出たくなかった。出番があっても打てないで怒られることばかり意識がいついた。ミスは許されない程追い込まれていたのを覚えている。私が父に求めているのは今思えば「共感」だったのだと思う。「あんなに練習したのに残念だったな」「次こそ頑張ろう」といった言

葉を求めていたのだと思う。あの頃の私は、自分のためではなく父の期待にこたえるためにソフトボールをやっていたのだろう。／そして父に言われて、一番ショックで記憶に残っているのは高校時代に言われた。「この家で一番偉いのはオレだ、オマエじゃない、何様のつもりだ」と言われた時だ。正直、嫌になった。家族というものが平等でなく、偉いのは自分という父がとても嫌だし、納得できなかった。／私の述べた通り、共依存により過度の期待を受けた結果は私のような弱い人間にとって悲惨である。もちろん今まで自分の意志を通さず生きてきた私もいけないのは理解している。しかし、子供の頃からそのような環境で育つとなかなか変われないのも事実なのである。／それは現代社会においても置き換えられるのではと私は考える。自分の将来の夢や自分の意見を持たない若者が多い。そのような人の中にはきっと私のように親の言うとおりに進んできたという人がいると思う。

父親との関係のことが、実に克明に書かれている。父親のいくつかの言動から、その「仕切り屋」という共依存の特徴が浮き彫りとなっている。文中に、やや舌足らずに、〈共依存〉＝「自己中心」とあるのは、共依存者の示す愛情が表面的な利他主義を装いつつ自己中心であることをそれなりに的確に捉えた言い方だと私は思う。

「お前のためを思えば」「あなたのため」という決めゼリフの背後にある利己的な他者支配・コントロールをこの筆者(A男)はしっかりと見抜いている。

私が驚いたのは、子どものため、息子のためというよりも、親の世間体や外間のために子どもを利用する、共依存のもっとも醜悪でおぞましいところが臆せず語られていることである。子どもを縛る「期待」の中身のエッセンスは、世間的な価値観、世間体である。

「子どもはねえ、親の見栄や世間体のために生きとるわけじゃないんですよ。その逆ですよ。親が子供ののために、見栄も外間もかなくなり捨ててくれる、このことを心の支えに生きとるんです。」という金八先生の名ゼリフを私は思い出しもした。

B君——私の母は今考えると、共依存の傾向があったように思います。支配者に気に入られるように、外ではムードメーカーとして元気に振る舞い、家では祖母の顔をうかがい、他人の評価を気にしすぎていたように思います。しかし、独りになったときの姿や母親と二人になったときの姿は、普段とはまるで別人のようでした。／そんな、母の姿をみて育った自分はまさに、共依存症のように感じています。自分の意見や意志を表すことはせず、他人の評価や意見の便乗を繰り返す。顔色やご機嫌を伺うことは特

に得意になり、意見の衝突するようなことは絶対にせず、他人に嫌われないように他人の目を常に意識してすごしてきました。戦略的に友達と話し、広く浅い関係を続けています。しかし、大学に入り、多くの人と話す機会が増え、感じたことは、世の中には自分のような人は多く存在していて、同じような親の中で育ったひとがおおく存在していました。

親の共依存に苦しみつつ、自分の対人関係や対人ストレス、生きづらさ・生きにくさをかかえているのがよく伝わってくる。とりわけ、文中の次の箇所は痛く胸をつくものがあった。「自分の意見や意志を表すことはせず、他人の評価や意見の便乗を繰り返す。顔色やご機嫌を伺うことは特に得意になり、意見の衝突するようなことは絶対にせず、他人に嫌われないように他人の目を常に意識してすごしてきました」。淡々として、実にそっけない書き方をしているが、なにか、あの太宰治の『人間失格』の語り口を彷彿させるような雰囲気があるように思える。「人間に対して、いつも恐怖に震えるのき、また、人間としての自分の言動に、みじんも自信を持てず、そうして自分自身の懊悩は胸の中の小箱に秘め、その憂鬱、ナアヴァスネスを、ひたかくしに隠して、ひたすら無邪気の楽天性を装い、自分はお道化たお変人として、次第に完成されて行きました」

た²¹」。

七、アダルトチルドレン(AC)——米大統領クリントンの場合

アメリカのアルコール依存症の治療の中で、共依存と並んで生み出された概念、用語に「アダルトチルドレン(Adult Children)」（略称「AC」）がある。もともとは、親が、アルコール依存症で家庭が安心・安全の場でなくなり、家庭として機能していない家庭の中で育ってきた大人というものだったが、現在ではもっと一般的に「親との関係で何らかのトラウマを負ったと考えている成人」あるいは「親による虐待や、アルコール依存症(薬物依存、性依存(不倫、浮気)、仕事依存(ワークホリック)、ギャンブル依存、買い物依存なども含む)の親がいる家庭といった機能不全家庭で育ち、その体験が成人になっても心理的外傷Ⅱトラウマとして残っている人」といわれている。太宰治の場合、母親による育児放棄、幼少期の「下男」「女中」からの性的虐待など多くのトラウマを負っており、その文学は、人間の根源的生きづらさ、脆弱さに満ち満ち、まさに「AC文学」と呼んでもよいものを持っている。

「アダルトチルドレン」(AC)は、一九九〇年代にマスコミや知識人の間で曖昧なまま使われて、誤解を生んできたことばでもある。「この世に存在しているもいい」という自己肯定感を抱けずに、

自分の主張や感情を殺して育ち、周囲の期待や顔色を読み取って従順すぎるほど「いい子」のまま成長した大人たち。いつもなんとなくあるいは強烈に生き難さを感じて理由が分からずに悩んでいる人々。

日本においては、近年は、その本来的な意味をあらわすのにアダルトサヴァイヴァー (Adult Survivor) が使われるようになってきている。いわば過酷な環境を生き抜き、苦悩の日々を生き延びた「生還者」である。そこには、生き延びたがゆえのささやかな誇り

ブライドがある。これは「ACブライド」と呼ばれもする。太宰治の次の美文には、それが見事に表現されている。「私には、誇るべき何もない。学問もない。才能もない。肉体よごれて、心もまづしい。けれども、苦悩だけは、その青年たちに、先生と言われて、だまってそれを受けていくらしいの、苦悩は、経てきた。たったそれだけ。藁一すじの自負である」。⁽³³⁾「富嶽百景」は、太宰の安定期にさしかかった時の作品で、「選ばれてあることの恍惚と不安と二つわれにあり」⁽³⁴⁾(短編集『晩年』『葉』のエピグラフ)といったかつての陰鬱な死の影を帯びた「ブライド」は後退し、かわって生きること、生活への覚悟と自覚がはっきりと表わされている。

アダルトチルドレンということばは、意味が曖昧なままに流布してしまっただが、もちろん医学用語ではない。機能不全の家庭に育ち苦しんできた人たちが、常日頃感じている「生きづらさ」を自分な

りに認識し、新たに自己を作っていくとする自覚のためのことばなのである。

さて、自分がACであることをカミングアウトした有名人としては、アメリカ大統領のビル・クリントンが人口に膾炙している。マスコミでも取り上げられ話題をよび、ACの普及に貢献したといわれている。

第四二代アメリカ合衆国大統領ウィリアム・ジェファソン・クリントン (William Jefferson "Bill" Clinton) 通称「ビル・クリントン」は一九四六年アーカンソー州に生まれる。父はビルが生まれる約三カ月前に自動車事故で死去。ビルが生まれた後、母は、看護師の勉強のため子どもを親に預け、ビルは四歳まで母方の祖父母のもとで育つ。四歳の時、母がロジャー・クリントンと再婚。義父はアルコール依存症者で、家庭内で暴言、激怒、暴力を繰り返した。ビルが小学生の頃、酒に酔った義父が家で発砲事件を起こしている。ビルは、殴られている母を庇って連れ出し、ガレージの隅で寝たことも何度かあった。⁽³⁵⁾ビルの母は、夫の暴力に疲れ果て、将来ある聡明で母親思いの息子に共依存する。ビルは心に深い傷を持ちながらも、母を支え、義父と母との調停役(「ピースメーカー」となり、不安な母の相談役、慰め役も引き受けていた(「リトルナース」)。アルコール依存者のいる家庭環境、母による共依存。ビルは、まさ

にA Cの典型といえる。彼には子どもらしい子ども期はなく、つねに母の唯一の「かけがえのない」希望の息子として振る舞い、また、その「期待」(欲望)に応えようと必死に頑張った。自責感、罪悪感、自己評価の低さに苦しみながらも、いや、それだからこそ、獅子奮迅、ビルは懸命に勉学に励み、家族の救世主たんとしたのだった。「僕ががんばれば、家族はハッピーになれるのだ、僕が出世して家族を立て直すのだ」とばかりに。ビルは「家族ヒーロー」となる。

六四年ジョージタウン大学外交学部に入学。六八年同大学を卒業。オックスフォード大学への二年間留学後イェール・ロー・スクールに入り、七三年博士号を取得し卒業。その後、アーカンソー大学で教鞭を取った。七八年アーカンソー州知事選挙に初当選。一度落選するが、八二年に再当選して、以後三期の連続当選を果たす。九二年の大統領選挙で当選し、九三年アメリカ合衆国大統領に就任。九六年アメリカ合衆国大統領選挙で再選を果たし、大統領の職を二期八年間にわたり務めた。

クリントンは大統領就任以前から多くの女性と交際があり、これは大統領選挙の最中から政敵の攻撃的とされたが、九八年にはモニカ・ルインスキー事件が発覚、全米を揺るがすこととなった。この事件では「ルインスキーさんと不適切な関係を持った」と告白させるを得ない状況に追い込まれ、弾劾裁判にかけられた。上院での

弾劾裁判では、有罪判決に必要な三分の二には達せず、大統領罷免は免れたが、現役大統領として大きな汚点を残すこととなった。

クリントンの行動は、世間一般に言う、「女好き」「男の甲斐性」といったものでは括りきれない、いわゆる病的な嗜癖行動といえるものであり、異性との恋愛関係や性的関係にのめり込む性依存、女性(男性依存、ラブ・アディクション、恋愛依存症といえるものである。七五年にヒラリーと結婚したが、七七年から九六年まで、七人の女性との交際があったとされる。

性依存の治療を専門とする精神科医岩崎正人は、クリントンの成育歴と家庭環境とのかかわりについて次のようにまとめている。

〈ビル・クリントンは義父がアルコール依存症という機能不全家族に生育し、義父は酒を飲み、母に対して暴力を繰り返した。ビルは母を守り、義父の暴力に巻き込まれ、ビルの心は深い傷を負った。ビルは幼少期、義父からトラウマ(心的外傷)を受けたのである。

一方、母は夫の暴力から身を守るためにビルに共依存し「母子カプセル」をつくった。母子関係は濃厚なものとなり、母の満たされない感情がビルにそがれ、ビルは母を守り、支え、母の期待を一身に背負った。ビルは母から代理の人生を歩くことを依頼されたようなものだった。ビルは母によって自分らしく生きることを阻害された。義父の暴力、母からの「やさしい暴力」＝共依存を受け、孤独

と不安に苛まれ、対人関係の不得手な、自己評価の低いまま大人となっていく。がんばりにがんばり、若年にして知事となり、政治家への道を幕進するけれども、心の傷は癒えず、劣等感と低い自己評価に悩み続ける。政治の世界での成功を実現するために順調に進んでいたが、身も心もすり減らし心の傷は一層深くなった。その心の傷を、女性関係によってなぐさめようとし、それが、次第にエスカレートしてビルはラブ・アディクションにのめり込んでいく。つまり、ビルは心の傷を癒すために仕事に没頭し、さらに心の傷を深め、ラブ・アディクションに陥ったのである⁽²⁶⁾

クリントン元アメリカ大統領のほかに、性依存・恋愛依存症だった有名人としてダイアナ元妃(旧姓スペンサー)(一九六一〜九七)がいる。ダイアナの場合、八五年から九七年までの十二年間に十二人の男性と交際した。幼少期の両親の離婚、親権争い。ダイアナは父方に引き取られるが、母から捨てられたという思いに深く傷ついた。彼女もまた機能不全家族で育ったACといえる。チャールズ皇太子と結婚後も、夫婦間のストレス等で、過食症(摂食障害)、買い物依存、自傷行為、そして性依存(恋愛依存)等の多重嗜癖(クロスアディクション)に陥っていき、恋人である、エジプトの大富豪の息子ドディ・アルファイドと共に自動車事故で不慮の死を遂げた⁽²⁷⁾。

文中でもいくつか触れているが、ACがとる生存戦略には、いくつかの役割的なパターンがある。⁽²⁸⁾

- (1) 「ファミリーヒーロー」(「家族ヒーロー」)
 - (2) 「クラウン」(「お道化者」、「おひやうけ」、「お茶目」)
 - (3) 「プラケイター」(「リトルナース」なだめ役、相談相手)
 - (4) 「スケープゴート」(犠牲者、家族の問題を自分の問題行動で肩代わりする)
 - (5) 「ロストワン」(いなくなった人 おとなしく存在しないようにふるまう)
- ビル・クリントンの場合は、(1)と(3)が当てはまる。太宰治は、(3)はもちろんだが、(5)の側面もある。親や先生、周囲の人間の顔色、ご機嫌をうかがい、たえずおびえ、恐れ、不安感を抱き、翻弄されている彼は、お道化者という生存戦略を選ぶ。「人間失格」の大庭葉蔵は「葉ちゃん」の生き方である。「お茶目」なこの道化師の笑いは、心の底から湧き出たものではなく、他人に怯え、他人に取り入れるために加工された偽物の笑いにほかならない。「握り拳をにぎった笑顔」。AC特有の怯えと不安と怒りを隠した、お愛想笑い、いわゆる「ACスマイル」である。たしかにその笑顔には、「人間の笑いと、どこやら違う。地の重さ、とでも言おうか、生命の洪き、とでも言おうか、そのような充実感は少しも無」かった。「つまり、一から十まで造り物の感じなのである」⁽²⁹⁾。しかし、もうひとつ注目のしたいのは、葉蔵のつくり笑いが、目立たないように存在しないよ

うに生きていく「ロストワン」の戦略でもあったことである。「とにかく、彼ら人間たちの目障りになってはいけない、自分は無だ、風だ、空だ、というような思いばかりが募り、自分はお道化に依って家族を笑わせ、また、家族よりも、もっと不可解でおそろしい下男や下女にまで、必死のお道化のサーヴィスをしたのです」^⑩。

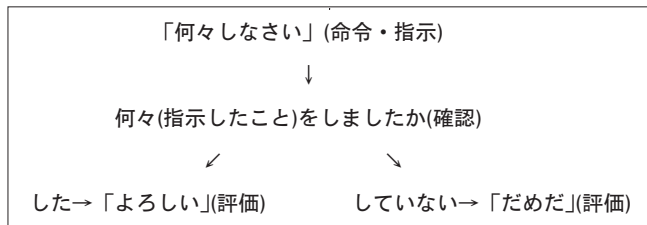
こうした葉蔵の、自己無化への願望、無へのあこがれは、若年から「希死念慮」が強く、何度か自殺未遂を繰り返してきた、太宰自身の生き方・生存戦略そのものと重なっている。富永國比古のことはを借りれば、太宰の「死の閾値の低さ」^⑪といえるだろうが、私としては、これまで触れてきたように、AC太宰の自尊心の低さによって来するものと考えたい。

八、操作・支配関係としてのことば

これまで共依存的な操作・支配の関係を、親子関係、家族関係に絞ってみてきたが、親密な人間関係、対人関係あるところつねに共依存の問題は発生すると私は考えている。

そこで、教育関係、とくに学校教育における教師と子ども・生徒との関係について目を転じてみよう。ここでも、親密な人間関係があり、親のように、さらには親以上に、子どもを愛し、慈しみ、育てる関係がある一方で、「子どものために思い」「子どもに良かれと

思い」この子をなんとか「いい子」にしたい一心で、教育的熱意は



「体罰」という暴力になることもある。いずれにせよ、教育関係には、慈愛、愛情、感謝にとどまらず、限らない憎しみ、恨み、怨嗟も深く渦巻いているのである。

では、教育関係をコミュニケーションの問題に絞り、教育関係における操作・支配の関係について考えてみよう。

上の表にあるようなことばのやり取りは、典型的には、会社、企業、軍隊、警察、官僚、役人(公務員)のタテ社会の組織・管理机构のなかで常態化されているものだが、学校教育、家庭教育の現場における教師・生徒関係、親子関係においても、広範にかつ根深く、陰に陽に、日常的に見られる事象である。

教師は自分よりずっと年齢の下の子どもたちを相手にし、評価権を持っているため、自分に厳しくなければ、批判のない世界、何をしようと誰も何もいわない居心地のいい教室の中で易きにつき、ど

こまでも流されていってしまう。かつて、中学校の国語教師大村はま(一九〇六―二〇〇五)はこうした易きについた教師のルーティンの現状を、「命令(指示)」と確認だけで教師は仕事ができってしまう」と指摘し強く批判した。

「教室に子どもを入れて、開口一番、「読んできましたか。」という人がありますね。これは何も教えないということになりませんか。：本来の学習室である学校を、学習室にしないで、「読んできましたか。」というのは、「読む」という一番大事なことは家庭でやるわけですから、それでは家庭が勉強の場所となり、学校は検査室ですね。読んできたかどうかをみる検査室ですね」⁽³⁾

教師は、子どもに指示・命令を出し、その指示・命令どおり着実に任務を遂行したかどうかを確認し、評価する。すべては子どもの任務遂行にかかっており、教師は何も教えず、そのための手立てはすべて子ども自身に任されているのである。大村は、こうした指示と確認に終始するだけで、何も教えていない、何も指導していない授業とその教師を厳しく諫め、指弾したが、逆に捉えれば、教えずとも教師は授業ができてしまうという職業的な甘さの問題性を大村は示唆しているともとれる。それ故、大村のような厳しい目で、

自らの授業実践―とくに教師と子どもとのことばのやり取り、その言説の総体を反省的にと捉え直し、一方的で管理的なものになっていないかどうか、絶えず検討していく必要がある。

教師―生徒関係の「会話」、「教室の会話」コミュニケーションの構造」の構造を精緻に分析しているものとして、佐藤学の諸研究⁽³⁾が大いに参考になる。佐藤は、英米圏での、授業における会話分析、ディスコース分析をとりあげ、教室における最も支配的な会話・ディスコースの単位として、「教師主導の発問と支持(teacher initiative)」↓「生徒の反応(student response)」↓「教師の評価(teacher evaluation)」という「IRE」の構造を指摘する。

〈一般の会話〉	〈教室の会話〉
「〇〇さん、いま何時?」	「〇〇さん、いま何時?」
「二時半です」	「二時半です」
「ありがとう」	「そのとおり」

「よく知っている人(教師)がよく知らない人(生徒)に尋ね、その応答に対して、尋ねた人に感謝するどころか、正否を判定し評価する。しかも、この「IRE」の連続において構成される会話の

方向性を決定し、話者を選択し発言の順序を決定するのは、この会話を一方的に主導する教師である。私の調査した日本の授業の事例の中には〈IRE〉の単位が一時間に百近くも頻発する授業があったが、そうになると、教師と生徒の関係は、機関銃のような発問で難詰する一人の検察官と集団の参考人にも類似した様相を呈していた⁽⁴⁾。

「そう」「そうだね」「そうそう」「そのとおり」といったことは、教師が何気なく頻繁に口にすることはである。佐藤学が、「検察官と集団の参考人にも類似した様相」というほど大げさなものではないにしても、少なくとも、子どもや生徒に与える心理的な影響あるいは子どもや生徒の立場からするとこれがどう受け止められているかということはしっかりと検討しなければならない。

私の経験でいえば、ごく些細で何気ない形であっても、「そうだね」と教師が頻繁に使っている教室では、子ども・生徒が積極的に発言しなくなる。その理由として考えられるのは、教師に「ちがう」「そうじゃない」「だめ」といわれることに對する怖れや不安が子どもに出てくるからである。クラスメイトがいればなおさら、大勢の前で恥をかくリスクも高まるため、勢い子どもたちの声は自信のない、小さなものになっていく。どんなに優しく穏やかな表情をして、

和やかに授業を進めていても、教師が、「そうだね」を頻発している限り、子どもたちは、教師の発問の背後に正解があると思い、間違うことを怖れ、委縮してしまうのである。子どもたちはすでに暗黙のうちに正解を掌握しているのは教師であり、最終的には正答か誤答という、教師の評価が下されることを知っており、そりゆえ何よりも、子どもたちは教師のさりげなくなされる「評価」を怖れているのである。これに對し、円熟した教師の授業に見られる「ああ」「なるほど」といった受容的な受け答えの方が「そう」「そのとおり」という受け答えよりも授業中の子どもへの発言は活発になる。

ただし、佐藤によれば〈IRE〉の構造は教育関係のすべてにおいて避けがたく存在しているわけではないという。「教育の場面においても、一般社会に近い会話の構造で会話が遂行される場合には、〈IRE〉の構造の頻度は激減する。生徒の問いを中心に自主的な探究を促進する授業や、大学のゼミナールのように生徒の発問と討論を中心に授業が進められる場合には、〈IRE〉の構造が現れるのは稀である⁽⁵⁾」と佐藤は、「大学の演習」を、〈IRE〉の構造の比較的劣性なものの例として取り上げている。大学のゼミは、教師と学生が、まだ解答や真実(真理)が明確になっていないひとつの課題やテーマを共有しながら共に探究し、検討していくケースが多い。教師も学生も共に對等に真理の探究に参加しているのである。

佐藤字は、「教室の会話の特殊性と教師の権力性は、最後の〈E〉においてもっともよく表現されている。教室の会話では、最後の〈E〉が介在することによって、対等な人間関係の対話の性格が剥奪されている」⁽³⁶⁾と述べ、かなり教師の「評価権」の問題にも踏み込んだ議論をしている。たしかにこの問題を煎じ詰めれば、教師の「評価権」をめぐる複雑な問題へと波及していく。

本稿では、この点については、私は踏み込むつもりはないが、私も、一大学の教師として、この問題は日ごろから頭をよぎる難問だと感じていいることは事実である。極端な例を想定すれば、評価権の乱用を通して、評価による子ども・生徒・学生の虐待、完全な支配・コントロールが可能となる。いわゆる職権の乱用、「アカデミックハラースメント」である。「評価」を全否定することは簡単だが、それは非現実的であり、教育実践、教育的行為自体、成り立たなくなる。重要なのは、評価のあり方、評価の仕方について絶えず教師自身が関心を持ち、つねにチェックを怠らないことだと思う。

九、「共依存」「戦闘合理性」をこえて——むすびにかえて

社会学の立場から、現代社会の解明のために「共依存」概念を積極的に取り上げているのが、イギリスの社会学者アンソニー・ギデンスである。ギデンスは、共依存を「生きる上での安心感を維持す

るために、自分が求めているものを明確にしてくれる相手を、一人ないし複数必要とすること」⁽³⁷⁾と規定している。つまり、共依存の人は、他者の欲求・欲望あるいは期待をとおして自分を定義づけられること、他者から必要とされることをつねに必要として生きる人なのである。献身、自己犠牲、頑張り、殉教・殉愛、殉情といった愛他的な美名の背後には共依存のメカニズムがしばしば隠されている。

さて、さらにこの概念を引き延ばして考えると、それが自己の欲求や・欲望を定義してくれる他者を見出すことで自己のアイデンティティを保持するための生存戦略であるならば、定義してくれる他者は、子どもや夫、妻でなくてもよく、それは、会社や組織、社会、国家などでもかまわないということになる。

実際、会社への献身、勤勉、自己統制、自己管理は現代資本主義のエートスにほかならない。社会学者の野口裕二は、次のように述べている。「ワーカホリックがなぜ共依存的かといえば仕事への熱中と業績の達成、そして、社会的評価の獲得というサイクルのなかに自己をつなぎとめていること、とりわけ重要なのは、自分を必要とし評価を下す他者の視線によって自己を定義しようとするその自己のあり方にある。つまり、他者からの評価のための努力と献身、そして、満たされぬ思いを原動力とする努力の繰り返し、というパターンである」⁽³⁸⁾。

現代社会では、組織や集団における「役割」への過剰適応は、「自己破壊的同調」(斎藤字)ともいえる様相を呈している。「役割的人格」「役割的自己」に自分を閉じ込めながら、ひたすら他者の欲望にすがって生きる「役割人間」なのである。

かつて斎藤字は、共依存の問題性に触れた著書の中で、共依存における「スピリチュアリティ(霊性)の障害」について指摘していたが、私は、この斎藤の捉え方に強く惹かれるものがある。

「共依存者はつねにスピリチュアリティ(霊性)の歪みを、つまりハイヤーパワーとのかかわり方の歪みを抱えている。共依存者はつねに自身がハイヤーパワー(神)であるか、ハイヤーパワーである他人に帰依する者(奴隷)なのであって、自身の世界観のなか
³⁹⁾に、自己存在の次元を超えたハイヤーパワーを持つことができない」

これは、馬車馬のように、わき目も振らず猛進し、多様な価値観や生き方、様々な複眼的な見方、考え方、選択が全くできなくなり、視野狭窄に陥っている状態である。ハイヤーパワーとは、神だけに限定する必要はなく、いわゆる「自分を超えた大いなるもの」、大自然や大宇宙、歴史や人類といったものも含まれる。共依存、ある

いは嗜癖、依存症など、何かにのめり込み、果てしなく依存するとき、ひとは、自分を超えた大いなるものとの対話や触れ合いを失い、スピリチュアリティ(霊性)不全に陥っているのである。逆説的だが、宗教依存・カルトなども霊性を失った「狂信」にほかならない。私は、依存症から回復し、「桃の花っていつからあんなにきれいに咲いていたんだろう。桃の花ってほんときれいだって初めて気づきました」と晴れ晴れとたたった多重アディクションの人のことを思い出す。失われた大自然のサイクルとの交感の生起。これは霊性の回復でもある。霊性についてかの鈴木大拙は「水の冷たさや花の紅さをその真実性において感受させるはたらしき」と述べている。⁴⁰⁾

社会学者見田宗介は、論文「近代の矛盾の「解凍」⁴¹⁾において、NHK放送文化研究所「日本人の意識」調査のデータ(『現代日本人の意識構造 第六版』NHK放送文化研究所二〇〇四年)に基づく日本の高度経済成長期から脱高度成長期にかけての意識変容(具体的に一九七三年と二〇〇三年とのデータの比較)についての鋭い分析を行っている。

見田は、この三十年間の最も目覚ましい変化の領域として「〈近代家父長制家族〉システムとこれを支えるジェンダー関係の意識の解体」をあげる。見田の捉える「〈近代家父長制家族〉とは、「高度

成長期」の主体的推進力であった「モーレッツ社員」「企業戦士」を影でささえた「夫は仕事、妻は家庭を守る」という性別役割分担の家族^⑬である。このシステムは夫の経済力と妻の生活処理能力^⑭が事能力への信頼と依存関係があつて近代の生産主義的な成長社会を支えてきたと見田は指摘する。

しかし、重要なのはその本質である。見田によれば、生産主義的な高度経済成長社会を支えてきた家族のシステムとは「生の全域の生産主義的な手段化^⑮＝合理化」が貫徹したものである。

近代資本制は、歴史的に見ても、どんな前近代的な「遺制」でも自分に好都合なものは再編成し活用してきた(奴隸制、王制、天皇制、部族対立、神話と宗教!)。「近代」の高度成長期の生産主義的な社会の全域の手段化^⑮＝合理化の一環として、生存と幸福を賭して「戦う家族」の「戦闘合理性」こそ、〈近代家父長制家族〉の、自由の封印と平等の封印の「根拠」であつた^⑯。たとえば軍隊は「戦う集団」としての「戦闘合理性」の典型であり、規律と階級制によって自由と平等を封印するもの組織された戦う集団、戦闘合理性の具現化にはかならない。

〈近代家父長制家族〉という形容矛盾が形作ってきたもの――「高度成長」の局面として「近代」の、生産主義的手段化^⑮＝合理化が全面化して、「近代」自体の理念である「自由」「平等」は封印さ

れてきたという見田の指摘は重要である。「自由」「平等」という近代市民社会の理念は、「封印」のままであった。確かに、現代社会では、「自由」は「競争の自由」(見田のいう相克性^⑰)、「平等」は、「機会均等」という競争の公正性にすり替えられ、結果の不平等を事後的に正当化するシステムにすぎなくなっている。

このように見田は、戦後の日本社会を鋭く分析しながら、未来の社会と精神の方向性についてのいくつかの理論的仮説を示しているが、私が強く惹かれたのは、次の点である。

生産主義的な生の全域の手段化^⑮＝合理化の圧力から解放された「自由」の理念、「平等」の理念の実現。そのためには、合理性から非合理性へ、という仕方で前近代に戻るのではなく、合理性の限界を知る合理性、「メタ合理性^⑱」方法としての合理性への転回。「人間と人間、社会と社会、人間と自然の関係の相克性をいたるところで相乗性に転回すること――〈戦闘の体制〉ではなく〈共生の技術〉としての合理性が、新しい安定平衡の局面を生成しつづける力をもつた合理性である^⑲」。

加速度的に人口爆発をみた高度成長のあと、七〇年代以降は「歴史の減速」といわれ、人口増加率は著しく変化し、安定平衡に向かう「定常型社会」を迎えつつある。高度成長社会を担った世代意識から、高度成長後を担っていく世代の意識のあり方はどのようにか

わっていくのか。

高度成長期の「生産主義的な生の全域の手段化」「合理化」と「戦闘合理性」の基底部を〈近代家父長制家族〉が構成してきたという見田の見解をもとに、戦後の我が国の教育、学校教育のあり方に目を転じてみるとどうだろうか。民主主義を標榜しながらも自由と平等を封印した「戦闘合理性」の世界だったのではないか。近代社会において典型的な戦闘合理性に基づく「戦う集団」は軍隊であるが、学校はそもそも歴史的に見ても「軍隊」的な要素や形式を取り入れて成立してきた。また、制服、整列、体罰、陰湿な「いじめ」も軍隊と学校は酷似している。赤坂真理は、わが国の戦後史を自伝的に語ったエッセイの中で、自身のアメリカ高校留学の体験に触れながら「アメリカの高校へ行って一番カルチャーショックを受けたのは「学校が軍隊じゃない！」ってことだった」と述べ、「日本の学校はなぜ軍隊じみているのか」と問いかけている。^⑭

無論、私は、学校が戦闘合理性に貫かれた、「戦う家族」と歩調を合わせた「戦う集団」にすぎないと言っているのではない。未来を目指した新たな動き・胎動、様々な試行も展開している。

戦闘合理性は、いわゆる児童文化の中にも大きな影響力を持っていたと思う。スポーツ根性漫画（スポ根）は、私の子どもの頃は全盛

時代だった。そして、とくに小学校時代、いつも楽しみにし、時には熱狂してみていたテレビのアニメの数々。そのアニメの主題歌、いわゆるアニソン群には、いまでも忘れられないものがいくつかある。それらが、今でも、我知らずふと口を笑いて出てくることもあるからおそろしい。愛唱歌とまではいかないけれど、慣れ親しんだ歌、記憶の片隅であるが、鮮やかに刻みつけられ残っている歌である。

「巨人の星」「ゆけゆけ飛馬、どんとゆけ♪」

「タイガーマスク」「ゆけゆけタイガー、タイガーマスク♪」

「みなしごハッチ」「ゆけゆけハッチ みつばちハッチ♪」

「ひょっこりひょうたん島」「だけど ぼくらは、くじけない

なくのはいやだ わらっちゃお すすめ、ひょっこりひょうたん島

♪」

世の中全体むきになって、すすすすめとやっていたのかもしれない。

「いざゆけや仲間たち♪」

原武史『滝山コミュニン一九七四』には、当時の小学生たちが集団活動の一環として「わんぱくマーチ」（フランス映画「わんぱく戦争」のテーマ）を声たからかに歌っていたことが、苦々しく忌まわしい記憶として語られている。^⑮

なぜこんなにも、ゆけゆけ、すすめと、歌に歌われたのか。

戦闘合理性への素朴な信頼と信仰。しかし、その背後になにか不安が潜んでいたように私は思う。

思うに、「いざゆけ」「ゆけゆけ」「すすめ」と鼓舞し、激励し、励ますのは、疲れてはいけいからではないか。そして、疲れる自分に対する不安感、おそれがあると思う。この怖れや不安感は、かなり根強くひとりの人間・ひとりの人生に憑りつくのではないか。

「散歩をしていて、体が熱くほてり、足もとでも重くなってきたので、おもわず、いつも行く公園のベンチに腰掛けごろんと横になりました。あれ、そういえば、いままでこんなことはしたことがなかったと思いました。確かに、こんなことしたことがなかった。公園のベンチで寝るなんて。疲れたら休めばいいとこの時ふと気づきました。こんなあたりまえのことなせいままでと情けなくなりますが、これが自分には分からなかった。疲れても休んじやいけない、頑張り続けよ、って自分にはっぱをかけしやにむに生きてきたんだとつくづく思います。疲れる自分が許せなかった。いつも自分をがんばれがんばれファイトファイトといっけいじめて突っ走り、暴走していたんですね。浅はかにも。疲れたら休んでいいんだよ。自分を許してあげる。どうもこれを『自分を甘やかすこと』とはき違え、自分を

許すもんかとガンバってきてしまいました」としみじみ話していた依存症からの回復者の人がいた。

痛みを我慢して、いつも病気をこじらせていたと言っていた人もいたが、我慢に慣れ、我慢が常態化すると、当の対象である「痛み」に鈍感になり、痛みすら感じなくなる。心頭を滅却すれば……の行き過ぎで、命すら滅却しかねなくなる。痛みを感じる自分を滅却すれば、全てに耐えられるという恐ろしい倒錯がここにはある。

依存症は、現代社会における戦闘合理性がもたらす病と考えることもできる。自由主義資本主義大国のアメリカは、まさに「依存症大国」でもある。とりわけベトナム戦争は米兵の中に夥しい戦闘神経症者と薬物依存症者を生み出した。その意味で、依存症から回復するということは、何よりも戦闘合理性信仰から解放されることを意味している。

赤坂真理は、「がんばろう東北」というスローガンの奇妙さについて語っている⁽⁴⁸⁾。私も、二〇一一年三月、福島で直接、身を以って震災と原発事故を体験したが、昨年、小用で福島に行き、福島駅の近くで見た横断幕にやはり不可解なものを感じ、何とも言えない不快感と脱力感を覚えた。そこには、「福島は負けない」と書かれていた。へこたれないぞ、くじけないぞ、負けないぞ、ということか。

やはりがんばろうということか。赤坂は、「あれだけの喪失を味わったひとびとに「がんばろう」とこんなにも一斉に言うとは、なにごとか?」と首をかしげる。私も無論、首をかしげる。未曾有の大災害、大惨事、大事故が起きたとき、なぜ、「負けない」、「がんばろう」なのか。

「がんばる」というこのことは、いったい私たちにとって何なのか。ここにも根強い戦闘合理性が垣間見られる。

大震災からひと月もたたないころ、テレビのワイドショーは、津波で壊滅した東北の町の子どもたちのある情景を映していた。それは、小学生の男の子が、何本ものペットボトルの飲料水を、一生懸命運び、配達する姿だった。小学生は、毎日、大切な飲料水を取りにいけない避難所のお年寄りたちに水を配達していた。僕たちもなにか力になりたいと、重い水運ぶ懸命な様子が健気で、ワイドショーのコメントーターたちは一様に、感心し、子どもにエールを送っていた。しかし、ひとりだけ、親身で悲しそうな顔をして、こう話しかけた人がいた。「がんばらなくていいよ、やすみなさい」と。私はこのことを聞き、胸が熱くなるのを禁じ得なかった。そのひとは、落合恵子。私は、そのことばに救われたような気持ちにもなった。「がんばらなくていいよ、やすみなさい」——霊的なことばだ

と私は思う。

注

- (1) 拙稿「教材「ゼブラ」と思春期の心の成長―共感と回復」〔福島大学人間発達文化学類論集〕二〇〇八年十二月 第八号 (教育・心理学部門)
 - (2) 拙稿「文学教材における思春期の自尊心——「嗜癪行動」から読む教材「少年の日の思い出」(H・ヘッセ)」〔福島大学人間発達文化学類論集〕二〇一〇年六月 第十一号 (教育・心理学部門)
 - (3) 拙稿「メロスの妹―教材「走れメロス」と〈共依存的〉人間関係」〔科学的「読み」の授業研究会 研究紀要13〕二〇一一年八月
 - (4) 拙稿「教材「夏の葬列」における〈語り〉の構造と人間関係―自由間接話法と共依存の観点から」〔岐阜聖徳学園大学 国語国文学〕第33号 二〇一四年三月
 - (5) 拙稿「「ごんぎつね」における共依存の病理―〈共依存〉の観点から教材「ごんぎつね」を読む」〔岐阜聖徳学園大学 国語国文学〕第32号 二〇一三年三月
- (6) 同 二十ページ

(7) 佐藤淑子『日本の子どもと自尊心』（中公新書 二〇〇九年 二四～六頁）

(8) 田中孝彦『子ども理解―臨床教育学の試み』（岩波書店 二〇〇九年 一九二～三頁） 田中は、この本の中で、「子ども理解」を中心にした教師教育、教員養成のためのカリキュラムを自らの実践を踏まえて克明に説明している。しかし、ジュディ・ハーマンへの度重なる賞賛と言及はあるものの、「心的外傷後ストレス障害」（PTSD）や様々な依存症、嗜癖行動の治療における集団療法の取り組み、とくに〈自助グループ＝セルフヘルプグループ〉の活動についての言及はまったくない。現実に学ぶと言っているながら、私にはなにか生ぬるい牧歌的な印象を強くする読後感が残った。無論、「共依存」についてもまったく触れられていない。医師、看護師、ケースワーカー、カウンセラー、教師、保育士など、人間にかかわるサービス業の人々、いわゆる「援助専門職」は、他人の世話を焼き、他人から必要とされる職業ということもあり、共依存的傾向が強いと言われている。他人の事を思いつつ支配コントロールという共依存的罫にはまらないためにも、できることとできないことの限界を見極め、他者との距離感をつかむ知恵、実践知が必要とされるのである。田中が教師教育の今日的な再編を強く主張するの

であれば、共依存についての知識・見識はぜひとも若者たちに身に着けさせたい重要事項だと私は思う。

(9) 斎藤学『「家族」という名の孤独』（講談社 一九九五年 六四頁）

(10) 信田さよ子『共依存』（朝日文庫 二〇二二年 一〇二頁）

(11) 「ダメメンズ」とは、ダメな男〃「ダメメンズ」ばかりを渡り歩いて行く、男の趣味が悪い女のダメ男体験を紹介する倉田真由美のノンフィクション漫画『だめんず・うぉ〜か〜』（週刊「SPA」一〇〇〇年から二〇一三年まで連載）から流行したことば

(12) 信田 前掲 一五一頁

(13) 斎藤学『アダルト・チルドレンと家族』（学陽書房 一九九六年 一三九頁）

(14) 太宰治の短編「二十世紀旗手」の有名なエピソードである。

（太宰治『二十世紀旗手』新潮文庫一九七二年所収）

(15) ジュディ・ハーマン『心的外傷と回復（増補版）』（中井久夫訳）（みすず書房 一九九九年 一六三～四頁）

(16) 同 一六四頁

(17) 同 一六五頁

(18) 中島敦『李陵・山月記』（角川文庫 一九六八年 一一八頁）

(19) 信田さよ子『愛しすぎる家族が壊れるとき』(岩波書店 二

〇〇三年 二二頁)

(20) 斎藤前掲一九九五年 二二四頁

(21) 太宰治『人間失格』(新潮文庫 一九五二年 一四〇五頁)

(22) 富永國比古『太宰治ADHD説』(三五館 二〇一〇年 三二〇三七頁)

(23) 太宰治『富嶽百景』(太宰治『走れメロス』新潮文庫 一九

六七七年 六二〇三頁)

(24) 太宰治の短編『葉』のエピグラフ(太宰治『晩年』新潮文庫

一九四七年 七頁)

(25) 斎藤前掲 一九九六年 八二〇三頁

(26) 岩崎正人『ラブ・アディクション 恋愛依存症』(五月書房

一九九九年 七五〇七七頁)

(27) 同 八〇〇八七頁

(28) 緒方明『アダルトチルドレンと共依存』(誠信書房 一九九

六年 二二七頁)

(29) 太宰治『人間失格』 前掲六頁

(30) 同 一五頁

(31) 富永前掲 六九頁

(32) 大村はま『教えるということ』(共文社 一九七三年 二九

〇三〇頁)

(33) 佐藤学『カリキュラムの批評』(世織書房 一九九六年)、同

『教育方法学』(岩波書店 一九九六年) など。

(34) 佐藤学『カリキュラムの批評』(世織書房 一九九六年 一八五〇六頁)

(35) 同 一八六頁

(36) 同 同頁

(37) アンソニー・ギデンズ『親密性の変容』(而立書房 一九九五年 一三五頁)

(38) 野口裕二『アルコホリズムの社会学』(日本評論社 一九九六年 一六二頁)

(39) 斎藤学『魂の家族を求めて』(日本評論社 一九九五年 二一六頁)

(40) 鈴木大拙『日本の霊性』(岩波文庫 一九七二年 一一五頁)

(41) 『思想』(第一〇〇二号 二〇〇七年十月)

(42) 同 八四頁

(43) 同 八五頁

(44) 同 八七頁

(45) 同 八九頁

(46) 赤坂真理『愛と暴力の戦後とその後』(講談社現代新書 二〇

一四年 二二六頁

(47) 原武史『滝山コミュニン一九七四』(講談社 二〇〇七年
二六六～七頁)

(48) 赤坂前掲 二九〇～二頁